朝日旧友会通信

朝日旧友会
東京都中央区築地五―三―二
朝日新聞東京本社内
〒104―8011
TEL 三五四五―〇一三一
FAX 三五四三―三三二八

挨拶する中江会長
左から新会賓代表中馬清福さん、徳江、笹井両副会長、秋山社長、粕谷東京代表

新年総会盛大に！ 本社側・会員三百七十人集う

新会賓五十四人を拍手で祝福

菅マエストロに活を　中江会長

強い新聞づくりで勝負　秋山社長

一記者の願いは「疑え」　中馬清福さん

東京朝日旧友会の平成二十三年新年総会は、一月二十日（木）午後四時から有楽町マリオンの朝日ホールで開かれた。寒波の居座る寒い日だったが、午後一時半の映画「桜田門外ノ変」上映前には約二百五十人が詰めかけた。

総会は中江利忠会長、笹井輝雄、徳江英景両副会長はじめ会員三百十二人が出席。喜寿を迎えた新会賓五十四人のうち出席者は二十二人。本社側から秋山耿太郎社長、粕谷卓志東京代表ら役員幹部約六十人が出席した。今回は会社側中堅幹部の陣容が変わったので、先輩会員から「いろいろ話を聞きたい。交流を図りたい」と多くが顔を見せた。

総会は森精一郎事務局長代理の司会で開会し、まず中江会長が「〝マエストロ菅〟に活を―民主主義の試練に論議も」と題して講演。「わが国日本を指揮する菅直人コンダクターは、旋律も全体の曲想もあいまいだ。采配もマエストロには程遠い。『失われた二十年』の課題も山積している。活を入れたい気持ちだ」と問題点を指摘した。

次いで森司会者が今年の新会賓を紹介、名前を読み上げ、会員から温かい拍手が送られた。

来賓として出席した秋山社長は「真っ暗な長いトンネルの出口が見えてきた。広告の大幅減収に歯止めがかかり上期は黒字に転じた。二年後を目標に新経営計画づくりに取り組んでいる。戦国時代でも勝ち残る『強い新聞』づくりに商品力と販売力で勝負する」と訴えた。

また新会賓を代表して中馬清福さんがあいさつ、「世に出た昭和十年はもう後戻りできない年で、天皇ですら『どうしようもなかった』と発言したほど。天皇機関説が葬られ、軍部と国粋主義者が幅を効かし、後は一瀉千里だった。新聞記者の鉄則は『すべてを疑え』だ。記者自身が疑い、考え、分析、自分の言葉で読者に…」と喜寿を迎えた一記者の願いを語った。

終わって懇親会。ホール全体がいっきに和やかに。お好みの飲み物を手に、話に花が咲いた。夜八時すぎ、次回の再会を約束して散っていった。皆々さまお元気で、また五月に会いましょう。

平成二十三年総会予定

［日時］定時総会　五月一九日（木）
［場所］朝日新聞記念会館（有楽町マリオン11階）
午後1時45分から映画「必死剣鳥刺し」を上映します。

「マエストロ菅」に活を
民主主義の試練に論議も

私は今年の年明けに、貴重な体験をした。大晦日に上野の東京文化会館でベートヴェンの「全九」を聴き、お開きのパーティーで新年のカウント・ダウンも出来たからだ。

「全九」とは、交響曲第一番から第九番までの連続演奏で、午後一時に始まって二曲演奏・一時間休憩を繰り返し、夜の十一時四十分過ぎにフィナーレとなる。これを日本で一人だけでやる指揮は過去に岩城宏之氏が二回、小林研一郎氏が三回したことがあるが、外国人としては、初めてロリン・マゼールさんが八十歳記念のタクトを振った。

八歳から指揮台に立って欧米の名だたるオーケストラを率いてきたマゼールさんの采配ぶりは、最後の「第九」になっても衰えを見せずダイナミックで繊細だった。

主旋律のパートに向ける右手のタクトと従旋律のパートに向ける左手とが渾然一体になる指揮ぶりは、さすがのマエストロに相応しいものであった。

菅指揮者、曲想・旋律も曖昧

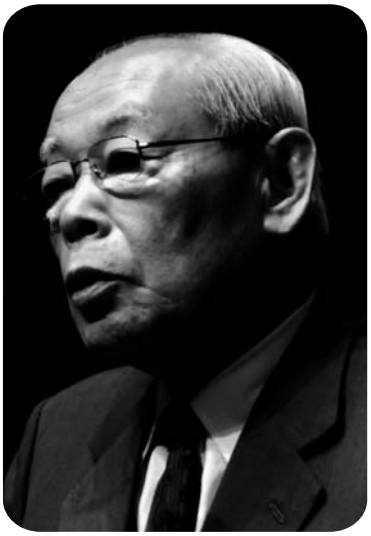
振り返ってわが日本国を指揮する菅直人コンダクターは、どうか。課題曲の全体の曲想も主旋律曖昧（あいまい）な演奏で、マエストロには程遠い采配ぶりだ。「失われた二十年」の後に突きつけられている山積した課題への取り組みが、改造内閣や民主党の新体制後もなお頼りなく、活を入れたい気持ちは拭えない。

世界のどの国も経験したことがない少子高齢化。国と地方の財政赤字の合計がGDP（国内総生産）の二倍と先進国で最悪。国連の今年の成長率予測では中国八・九%、米国二・二%、ユーロ圏一・三%に対し一・一%と主要国・地域で最低。昨年GDP第二位の座を中国に奪われた日本の総合競争力は、経営開発国際研究所によると一位シンガポール、十八位中国、二十三位韓国にも及ばず二十七位。

こうした冷厳な事実の中、菅首相が年頭の記者会見で謳い上げたTPP（環太平洋パートナーシップ協定）への参加による「平成の開国」、消費税引き上げを含む税制と社会保障の一体改革、政治とカネの問題へのけじめ、という三本柱に、本当に実現への保証があるのか疑問が残ったままだ。

そんな中、「イノベーションの嵐で高度知識産業への転換を急げ」という提言がイノベーション実践研究会（会長岡本康雄・東大名誉教授）から元日に発表された。提言をまとめた座長の木代泰之さんは、昨年旧友会員になったばかりの元科学部、経済部、経営戦略室のベテラン。「日本経済に明るい話題が聞かれなくなって久しい」という書き出しで綴られた提言の中身が傾聴に値するので、紹介したい。

リーマン・ショック後の世界の産業構造がICT（情報通信技術）を中心に大きく転換したのに、日本は官民ともに、バブル崩壊からの延長で回復をリストラばかりに頼って進めたため、チャレンジ精神が薄れ先端技術と新規事業の開拓が後手に回った、とまず指摘する。



中江旧友会会長あいさつ

日本得意の技術で新規事業開拓

そして①ICTを駆使した情報化社会を前提とする高度知識産業への進化を目指す②グローバルな生産・流通網で国際的な水平分業を進め、この海外収益を国内の研究開発投資に還元させて雇用の拡大にも繋げる③アジアでの経済安全保障にも有益なTPPやFTA（自由貿易協定）の締結で国内の淘汰を促す④二〇三〇年までに十四億人増える世界人口に備えてエネルギー、水、食糧、都市インフラ、環境などの整備に日本得意の技術とビジネスを生かす、などを提案している。

また正月休みに読んで一番感銘を受けた『荒廃する世界のなかでこれからの「社会民主主義」を語ろう』という本がある。ロンドン育ちでニューヨーク大教授を務め『ヨーロッパ戦後史』で評価されながら昨年八月に六十二歳で亡くなったトニー・ジャット氏の著作。

ここでは、規制緩和、市場原理、グローバル化などを勧めた「ワシントン・コンセンサス」が世界的に繁栄と個人昇進の幻想を生んで、政治的解放や社会的正義に取って代わった事実を解明。その結果として、例えばウォルマートのCEO（経営最高責任者）の報酬が平均的従業員の賃金の九百倍、創立者一族の財産額が米人口の底辺部四〇%の人々の財産額とほぼ同じ、という実態も紹介されている。

そして「二十世紀という偉大な改革の世紀から受け継いだ平等などの諸制度や諸権利を守り、その中の尊い遺産として、今日の選択肢としては他の何にも増して優れている社会民主主義」を推しながら、「自由な社会の市民として自分たちの世界を批判的に見て行動しなければなりません」と結んでいる。

本紙の一月八日付「空回りする民主主義」と題したオピニオンのページでフランスの人類学者エマニュエル・トッド氏は、「自由貿易の思想が世界中に需要の不足と不平等をもたらし、ハイパー個人主義による社会や共同体の否定」に繋がっている現実を訴えた。二十一世紀の民主主義の試練や在り方をあらためて論じ合うべき時が、到来したのではないかと思う。

旧友も現役と手を携え展望を広げよう

こうした新提言や、本紙が昨年暮れと今年からキャンペーンを始めた「孤族」対策、教育の全社会的な改革などに菅政権も積極的に取り組み、長期的で説得力のあるグランド・デザインを練り直して果敢に実行に移してほしい。

秋山社長は年頭の社員へのあいさつで「今年は新聞もデジタルも、という新しい発想のもと、全社挙げての『攻め』の年にして展望を広げてゆきたい」と訴えた。私たち旧友も、現役と手を携えながらお互いに頑張ってゆきましょう。

社長あいさつ

社業報告する秋山社長

厳しい時代に勝ち残る「強い新聞」へ
ネット時代でも中核は「紙の新聞」

本社の経営状況のご報告をいたします。長く続いていた広告収入の落ち込みが、どうやら底を打ってきました。真っ暗な長いトンネルの出口がようやくみえてきたといってよいかと思います。二〇〇八年度、二〇〇九年度と二年連続で営業赤字が続きましたが、二〇一〇年度の上期は黒字に転じました。広告の大幅減収に歯止めがかかってきたことと、社員の賞与削減など人件費を抑えたことが効いてきたためです。このままいけば、二〇一〇年度を通じての営業黒字が視野に入ってきます。

長いトンネルに出口、上期は黒字

とはいえ、世の中の流れは速く、新聞を取り巻く環境は依然として厳しいものがあります。ホッとしているヒマはありません。目下、経営企画室を中心に二〇一五年度を目標年次とする新たな経営計画づくりと取り組んでおります。

ごく大まかな考え方をご紹介しますと、本社の仕事を中核となる新聞事業とそれ以外のデジタルや不動産などの収益事業とに分けて、新聞事業については赤字にしないという意味での「収支均衡」を目指します。新聞以外の事業でしっかり利益をあげ、この先、会社が生き延びていくのに必要な戦略投資の財源を確保します。本格的なインターネット時代を迎える中で、紙の新聞発行とデジタルで様々な媒体に発信していくことを融合させた「ハイブリット型メディア企業」として生き残っていく姿を想定しています。

ネット時代にあっても、紙の新聞を発行する事業を社業の中核にしっかり位置づけていく方針には揺るぎがありませんが、同時に、大きな柱となるのが、デジタルニュースを様々な媒体に発信していくビジネスです。

ご存知のように朝日新聞社は、パソコン上のウェブサイトの「アサヒコム」でデジタルニュースを発信しています。これは、読者からはお金をいただかず、広告で収入を得るビジネスです。世界中のほとんどの新聞社が、こうした形でデジタルニュースを発信していますが、結果として儲けているのは、巨大なポータルサイトを運営するヤフーやグーグルなどのIT企業であって、コンテンツを提供する側の新聞社は、さっぱり収益があがりません。そこで、無料のデジタルニュースを有料化する試みが、フィナンシャルタイムやウォールストリートジャーナルなど欧米の新聞を中心に始まりました。日本では、去年春に日経新聞社が初めて本格的な有料の電子新聞を発行し、去年末までに有料読者が十万人の大台を突破したそうです。三年間で三〇万人を目標としていますが、多分、前倒しで達成するのではないでしょうか。

では、朝日新聞はどうするのか。日経新聞とは違って、北海道の稚内から鹿児島の奄美大島まで、全国に張り巡らせた専売網があります。紙の新聞の販売に影響が出てくるような電子版の展開は避けなければなりません。ASAの皆さん方とご相談し、協力していただけるとの見通しが得られることが条件となります。ASAの協力が得られるならば、という前提条件つきで、この春ごろから電子版を本格展開したいと考えています。

まずは、先行する日経新聞の事例のメリット、デメリットをよく研究させてもらいました。その結果、ビジネスモデルとしては、新聞の読者に電子版の併読をお勧めするケースを中心として、読者からいただく電子版料金の一部を販売店側に還元することにします。

購読料、折り込みに続く「第三の収入」

紙と電子版の併読は、紙の新聞の「商品力」を高めることが狙いですから、電子版には紙の新聞とは一味違った様々なコンテンツを提供していき、無料のアサヒコムの記事は段階的に制限します。本社にとっての電子版は、新聞事業を支えていく新たな収益源という位置づけですが、ASA側から見ても、新聞購読の手数料、折込収入に続く「第三の収入」とすることが出来るならば、双方にとってメリットがあるという考えです。

デジタル事業としては、他にKDDI、テレビ朝日と提携して取り組んでいる携帯電話事業の「EZニュースEX」が昨年末には会員数一一〇万を超え、現在はスマートフォン対応を急いでいるところです。ソニーKDDI、凸版印刷と協力して立ち上げた「電子書籍」のプラットフォーム事業も、昨年末から本格的に始まりました。朝日グループのテレビ局などに有料で速報データを流す「ABIS」というニュース配信事業も、配信先を拡大しています。また、旧友会の皆様方に写真データの入力作業などでご協力いただきました「フォトアーカイブ」は、今年中に一〇〇万枚を超す写真データが蓄積され、国内で最大級の写真データベースとなります。このほか、複合機メーカーのリコーと提携して、オフィスの複合機からデジタルニュースを取り出す事業も今月から始めたところです。

日本の新聞社は、全国紙、地方紙とも、厳しい逆風の中でも、過去の蓄積を活かすなど何とか生き残ってきました。だが、業界全体としては、部数の低迷と広告減収という長期的なトレンドは変わっていません。新聞協会の調べでは、去年一年間で日本の日刊紙の総発行部数は、約一〇〇万部減りました。その約八五%が統合版地区での減少です。人口の減少と高齢化が進んでいることによって、新聞の市場は、毎年少しずつ縮小しています。これから先も全部の新聞社が生き残れるか。そうはいかないだろうと私は思います。

他の多くの業界と同じように、新聞業界も「強い新聞」が生き残り、「弱い新聞」は淘汰される時代に差し掛かってきました。戦国の世に勝ち残るには「強い新聞」になるしかありません。それは商品力と販売力の勝負です。

残された問題年金制度

今年中には年金受給者である退職したOBの皆さんの人数が、現役社員を上回るという、これまで経験したことがない状況を迎えます。デフレ経済が続くことを前提にすると、中長期的に見ても、朝日新聞社の企業年金制度のあり方を見直すのは、避けられないように思います。「代行返上」の手続きが完了した後、年金制度改革の進め方についての会社の考え方をお示しし、OBの皆さんのご意見をお聞きする場なども設けて、議論を進めていきたいと考えております。朝日新聞社の経営には、今はまだ、余力はあります。しかし、先行きを考えると、給与などの固定費の負担はなるべく軽くしておき、業績に応じて賞与などで弾力的に対応できるようにしておいた方がよいと、私ども経営側は考えております。

幾多の諸先輩、先人が血のにじむ努力で築きあげてきた朝日新聞社を私たちの時代に衰退させるわけにはいきません。精いっぱいの努力を続けてまいります。旧友の皆様方には、引き続きのご支援を、そして、厳しいご叱声を賜りますようお願いいたします。

●●●●喜寿記念講演●●●●

いまこそジャーナリストの使命を

喜寿代表　中馬　清福さん

本日は、一九三五年、昭和十年生まれの私たち朝日人を、旧友会「会賓」に列して頂き有り難うございます。喜寿、といわれても数えの年齢なので実感がわきません。皆さまにお祝いいただきましたことで「やっと俺もこの歳まで生きてきたのか、嬉しいことだ」と思うようになりました。

講演する中馬清福さん

後戻りできない宿命背負った年

我々が生まれた昭和十年は、もう後戻りできない年でした。昭和六年に満州事変。七年に「5・15事件」、八年に国際連盟脱退です。この年、私が現在働いている信濃毎日新聞では、主筆・桐生悠々が社説「関東大演習を嗤ふ」を執筆しました。これに、陸軍と地元の在郷軍人の団体が反発、信毎潰しに躍起になった年でもあります。

昭和九年。あまり知られておりませんが、実は、後の日本のとって重要な事件が発生しています。二年後の「2・26」事件の主役、村中孝次、磯部浅一らがクーデター未遂事件、いわゆる士官学校事件を起こしているのです。

それに対する処罰はまことに軽いものでした。休職処分だけです。いい気になったのでしょう、二人は昭和十年――（我々が生まれた年です）――。休職中の身でありながら、傍若無人、一方的な〈粛軍に関する意見書〉を各方面にばらまきます。それでやっと免職になりました。士官学校事件、粛軍意見書配布事件のとき、厳重に処分しておけば、「2・26事件」は起きたとしても、違ったものになっていたことでしょう。

しかし、当時の日本は彼らに強い姿勢がとれませんでした。天皇ですら戦後に「どうしようもなかった」という趣旨の発言をしています。軍部は真っ二つに割れ、その一方が村中や磯部を持ち上げ、そそのかしていました。彼らの免職からわずか一カ月後の十年八月十二日――（私がこの世に生を受ける十日前のことですが）――陸軍省軍務局長・永田鉄山が白昼、陸軍省内において皇道派の相沢三郎に切り殺されます。

日本の歴史背負って駆け抜けた人生

恐るべき狂信的国粋主義者の出現

この昭和十年、美濃部達吉の「天皇機関説」が葬られました。狼煙をあげた狂信的な国粋主義者たちを支え、一緒になって彼らを廃人同様にしたのは、信毎追い落としのときと同様、軍部と在郷軍人の組織でした。後はもう一瀉千里でありました。

というわけで、子供時代の記憶も戦争体制一色です。私が生まれた九州・鹿児島は、中国やアジア諸国への進出拠点でしたから、例えば皇紀二六〇〇年、昭和十五年、五歳でしたが、鹿児島市で大々的な軍事博覧会が開かれ、本物の戦車に初めて触ったのでした。戦争が激しくなると、沢山の特攻隊基地ができます。当然、日夜、米軍機による空襲です。わが家も焼夷弾攻撃で燃えました。そして敗戦。その秋、南方から復員させられた膨大な量の戦車が学校横の広場に並べられました。砲塔は外され、油漏れしている戦車群……。格好の遊び場でしたが、子ども心にも、余りに哀れな姿でした。

懐かしの同期生はいまでも呼び捨て

入社は昭和三十五年、ちなみに東京本社編集局の同期生は（私たちは今でも年に二回、定期的に集まっていますが、入社以来、今でもお互い呼び捨てですので、名字だけ紹介しますと）――鵜沢、木村、香西、小林、谷口、内藤、西島、広本、それに私です。あと二人、柴田は本社社会部にあがり、特ダネを書いて帰宅した明け方、ポックリ病で亡くなり、もう一人の菅野は甲府支局で入浴中不慮の死を遂げました。

私の最初の赴任地は秋田です。原稿の締め切りは確か午後六時でした。電話送稿からアークフアックスへ変わる時代です。九時ごろバック便をジープで駅に届けると、支局長が「さあ行くか」と声をあげ、以下、にぎやかな川端へ繰り出す日々でした。まだ食糧難のときです。夢のような「八郎潟の埋め立て」に期待をかけていたころですから、私も「埋め立ててお米の大増産を」と太鼓をたたきました。いま、瑞穂の国、信濃のあちこちで「放置され荒れ果てた田んぼ」を見ると、八郎潟干拓を記事にしていたころを思い出して複雑な気持ちになります。

お巡りさん変なセキ「公害」の原点

二年後に横浜支局に移りました。鶴見・神奈川のサツ回りで、交通係のお巡りさんたちがそろ

厳しい世界の現実認識を読者へ

って変な咳をする。「第一京浜と産業道路に立つといつもそうなんだ」と言う。記事にし、病院に行くよう伝えはしたものの、そこまで。「公害」という言葉が紙面に乱舞し始めるのは、しばらく後のことでした。

当時、馬車道にあった支局の近くは、米軍が占拠していた跡地が大量に残っていて、「関内牧場」と呼ばれていました。本牧あたりには米兵専用の女性が部屋を借りて住んでいる。そこで多くは金銭的な理由からでしょう、ときどき刃傷沙汰が起きます。泊まりの夜だと現場へ行かなければならない。派手なベッドの上で若い女性が殺されている。そんな凄惨なシーンを二度ほど見ました。米軍との付き合いはそのころからです。横須賀や厚木など、当時から神奈川県は沖縄に次ぐ米軍基地の多い県でしたから、特に横須賀にはときどき足を運んでおりました。

政治・整理・防衛から安全保障へ

一年半後、政治部に配属されました。整理部を経験して政治部に戻ると三島事件、しばらくすると、中曽根康弘防衛庁長官時代の防衛記者を命じられます。戦争でひどい目に遭った縁でしょうか、以来、今日まで日本の安全保障問題を追っ掛けております。

実は、逃がれられないのです、あの問題から……。

私たち十年生まれは、国民学校四年生のときに敗戦を迎え、担任の先生を初め大人たちの言うことが一〇〇%変わる、という貴重な経験をしています。だからでしょう、国も人も世界もまたひっくり返るのではないか、という不安、というか諦め、といったものを常に引きずって生きています。アメリカだろうが中国だろうが、まるごと信じたことはありません。どうせ、いざとなれば、誰も、どの国も、わが身が一番、他人のことは二の次三の次、といった諦め――私が、いつまでも「核の傘」という文学的表現の核政策を信じないのも、そこから来ています。

記者の鉄則、すべてを疑え！

すべてを疑え。これは新聞記者の鉄則でした。「誰の言動も疑ってかかる」そんな生き方を強いられた私たちの世代は、記者という職業に向いていたのかもしれません。

いま私はあえて「鉄則でした」と過去形を使いました。というのは、最近の紙面を拝見していると、我が朝日を含めて、「疑うこと」から出発して仕上げられた記事が少なくなったような気がするからです。若い世代は、「疑うことは人を疑うこと、それは失礼なことだ」と思うのでしょうか。その優しさは大事ですが、せめて権力相手のときぐらいは、「国家は、役人はウソをつくことがある」という前提で、仕事に当たってほしい。

入社して間もなく読んだジェームス・レストンの著作の一節を思い出します。

「今日の変動に満ちた世界における私たちジャーナリストの使命は、一つの陣営の応援団と化さず、できるだけ多くの人々に、このめまぐるしい激しい世界の現実を認識してもらうことなのだ。」

この言葉は今も生命を持っています。

沖縄の米軍基地問題について言うなら、米国の一流の超政治家、役人、学者の言い分を朝日新聞が豊富に紹介してくれたことは非常に有益でした。だが、願わくは、インタビュー記事と併せて、これはどういう意図で出てきたか、記者自身が疑い、考え、分析し、自分の言葉で読者に伝えてもらいたかった。これが喜寿を迎えた一記者の願いです。

古巣を去ったあと、小なりといえども同じ「新聞」という職場で働いていて、改めて感じることがあります。それは、朝日新聞が如何に大きな存在か、ということです。「朝日はどう書いているか」――朝日の読者だけではなく、それ以外の読者までが強く意識している、その意味で、今も朝日は偉大です。

社においては入社年次が異なりながら、同じ昭和十年生まれということで仲良くしてもらった滝井禧夫さん、筑紫哲也さん、角倉二朗さんは既にこの世を去り、共に今日の喜びの杯をあげることができません。残念です。ここで名前を読み上げることのできない、同年、同期のすべての故人の冥福を祈って、私の挨拶を終わります。

有り難うございました。

ご苦労さま　選考委員は次の皆様です

ことしは旧友会役員、幹事の改選の年です。ご面倒をおかけする選考委員を次の皆さまにお願いすることになりました。同委員会では五月の定時総会までに新役員、幹事を選考し、同総会に諮る予定です。

●編集（6）
天野重夫　黒田正純　牧野雄一郎　秋山康男　加納安實　柴田鉄治

●業務（5）
海野武　小林三千夫　中澤信男　都丸司　芝二美夫

●工務（5）
利根澤正弘　田谷宣夫　栗原裟哉　星野富栄　加藤嘉照

●出版（3）
宇野博　岡村徹　広橋敏栄

●連合（3）
大野出穂　古内啓毅　下山勝

（敬称略）

平成23年 新年総会出席者

新会賓出席者

（出席者22人）

（あ）青野　楷　浅井泰範
（い）伊波新之助　市川　健
（お）大島吉美
（き）清時竹彦
（く）熊倉一郎
（こ）小山千宏
（さ）笹井輝雄
（し）志村　勇　柴田鉄治
（す）菅野清志　杉山恭一
（せ）善當治昌
（た）谷　義郎
（ち）中馬清福
（な）内藤頼誼
（ひ）菱沼幸次　開内恭寛
（や）山本孝治
（よ）吉本光一

会員出席者

（計290人）

（あ）青山　勇　荒井利尚
阿部征夫　秋庭武美
天野重夫　粟田房穂
秋山康男　莇　栄吉
相沢守也　阿久津一恵
荒木忠直　粟田伊三雄
安部光俊　阿部和義
（い）伊藤裕造　石井哲次郎
池田　守　稲永金仁
飯野幹雄　稲川　伸
乾　雄成　板垣　誠
石井忠之　石川喜代司
石岡統明　板津直成
井上日雄　池田正勝
伊東義雄　伊藤　壮
（う）植木　栄　牛場昌夫
宇野勝己　宇賀田達雄
海野　武　内山國彦
内山鶴雄
（お）大屋雅之　小野恵夫
岡部康世　大嶋二郎
大沢弘武　大重二夫
大原広哉　大江　廣
岡田　肇　大塚一郎
奥川恭子
（か）金子　保　川原基尚
蒲田浩二郎　川又健一
川辺久信　川口信行
粕谷日出夫　春日廣之助
香月浩之　金井　進
金子良三　唐木田卓司
片岡久明　金子　正
加藤章吏　川戸弘次
加藤嘉照　川名　宏
亀本泰夫　神田橋哲夫
梶　光雄　加納安實
笠松迪代　加藤次一
叶内　均　鏑木　進
軽部　平　亀井正雄
片山朝雄
（き）君和田正夫　菊原睦夫
岸田隆秀　菊地政則
菊池　武
（く）窪田康孝　黒川ハジメ
栗原裟哉　九原常雄
工藤叶二　工藤健一
熊澤　誠　黒田正純
桑原章輔
（こ）近藤行雄　込山光雄
五味秀雄　小林　功
後藤清光　紺谷安弘
高口信行　小林清吉
小坂健介　郷田光明
後藤　襄　小林　進
国府　彪　小林佐千雄
小林昭忠　小勝竹雄
近野　巌　児玉浩憲
小松　直
（さ）桜井孝子　坂巻　武
猿見田肇雄　佐藤良逸
斎藤善男　作間敏夫
坂井清保　沢野正明
佐々木博志　斎藤俊郎
（し）柴　昭二　甚野隆正
志村嘉一郎　志村和雄
清水　勝　下村満子
静井貞夫　清水太一
新　節夫　芝二美夫
志賀　浩　清水希貞
芝　實　島田貴明
（す）鈴木開二　杉谷隆司
杉浦悦子　数度富夫
須田　徹　鈴木益民
鈴木沙雄
（せ）仙名　紀
（た）田中右太生　竹内實昭
竹内　晟　滝下　修
竹村文雄　竹田　純
田辺昇一　詫摩俊一
高木敏行　武田　透
谷　久光　谷口富喜男
高見弘保　高野壽昭
竹市義弘　田中豊蔵
田辺　功
（ち）千綿雅夫
（つ）月成英信　辻　徹哉
鶴谷守男　塚崎定一
（て）寺田眞文　寺内勝一
照山恵美子　寺田達雄
（と）徳江景英　戸引和夫
都丸　司　徳永哲哉
豊田　明　冨森叡児
豊田松夫
（な）中江利忠　中島富次
長久保雅生　中澤勝巳
中野義次正　中村雅俊
中村糾造　永田芳男
中島善範　中島清成
中野　劦　中島　泰
永田清春　中北宏八
成川信男
（に）蜷川真夫　二本柳典彦
西村　誠　西井哲郎
錦織正文
（ぬ）沼上　勇
（ね）根津静男
（の）野本　登　野地一也
信澤秀男
（は）初山有恒　林　常蔵
長谷川俊郎　畠山弘道
羽生　弘　原　敏博
原田利次　林　荘祐
（ひ）広橋敏榮　平賀義男
平野新介　比留間悦雄
広瀬幸雄
（ふ）深草眞一　福岡照夫
藤巻　隆　藤田修三
藤田　実
（へ）別府次郎
（ほ）房園　茂　堀野典久
堀井淳夫　細田晴夫
星野富榮　洞口和夫
掘越作治
（ま）増田　稔　牧野信彦
牧野　武　馬来勝彦
松本精次　松井　茂
松山幸雄　牧野詔正
松　功　松本仁一
（み）水木初彦　三宅勝喜
宮内　繁　宮崎千勝
宮澤恭人　三由賢二
峯岸久雄　宮崎仁一
三野孝文　三石　昭
宮坂秀一　宮本義忠
溝部忠増　水川　毅
（む）村野　坦　宗田文隆
村上吉男　村田歓吾
村川信弥　室岡和男
（も）森精一郎　諸　寿子
森　修二　茂貫正記
森川　潔　森田恭生
（や）山越英一　築場敏子
山村行志　山下靖典
山崎有一郎　柳瀬幸洋
山本久二男　山森久義
山本祥之　山下英昭
山川三千雄　山下道照
山本　武　安中宏明
山崎利治
柳泉俊介　山崎悦孝
（ゆ）雪江武雄
（よ）横田稲光　吉田弘文
吉田耕司　吉川　宏
吉田成村
（わ）渡邊　宏　和井田祐三
渡部二六　渡辺幸男
渡辺　登

ご寄付

ありがとうございました

中江　利忠様　五千円

宮坂秀一さん、秋山社長、牧野詔正さん

下村満子さん、中江会長、林荘祐さん

井上日雄さん、香月浩之さん、君和田正夫さん

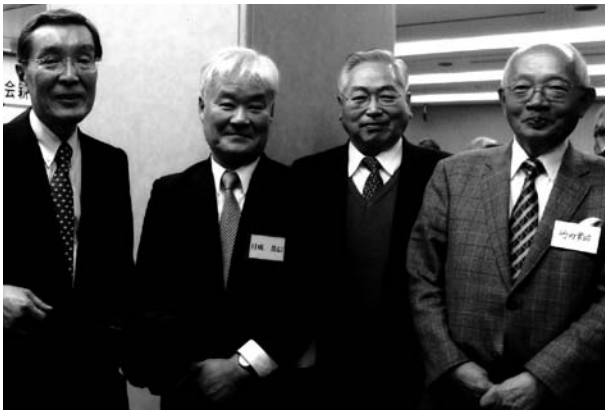
中馬清福さん、笹井副会長、木村伊量西部代表

片山朝雄さん、竹田純さん

熊倉一郎さん、牧野武さん

柴田鉄治さん、小山千宏さん

徳江副会長、開内恭寛さんご夫妻、大原広哉さん



茂貫正記さん、月成英信さん、大沢弘武さん、竹内實昭さん

小坂健介さん、内藤頼誼さん、中島善範さん

新節夫さん、秋山社長、平野新介さん

中野劦さん、山森久義さん、熊沢誠さん、工藤健一さん

浅井泰範さん、田中豊蔵さん、秋山康男さん、中北宏八さん

室岡和男さん、芝實さん

中島清成さん、洞口和夫さん、鈴木益民さん、村野坦さん

渡辺宏さん、齋藤善男さん

藤田修三さん、谷口富喜男さん、小勝竹雄さん、檜山隆監査役、片岡久明さん、沢野正明さん

加藤次一さん、川原基尚さん

山下道照さん、宮田善光製作担当、市川健さん、谷義郎さん

稲川伸さん、山本孝治さん、和井田祐三さん

内山鶴雄さん、岸田隆秀さん、武田透さん、郷田光明さん

小林進さん

軽部平さん、加藤章吏さん

都丸司さん、天野重夫さん

別府次郎さん、板垣誠さん

村田歓吾さん、滝下修さん

菱沼幸次さん、渡辺登さん、柴昭二さん

森川潔さん、黒川ハジメさん、市川健さん、桑原章輔さん

大塚一郎さん、松功さん、沼上勇さん、中沢勝巳さん

松本仁一さん

山下英昭さん、大島吉美さん

吉本光一さん

清時竹彦さん、内山國彦さん

高見弘保さん

竹村文雄さん、岩松宰正さん

小野恵夫さん、山崎利治さん

小林昭忠さん、善當治昌さん、杉山恭一さん

叶内均さん、柳泉俊介さん